
夜空に響く

N238

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜空に響く

【Nコード】

N7369Q

【作者名】

N238

【あらすじ】

夏休み、補習の日々に追われる高校生、藤宮 ふじみや 凪 なぎ。

友達付き合いや学校、色々なものに疲れ気味の彼女。

しかし、そんな彼女を幸せにするもの。

それが彼女の彼氏、桐谷^{きりたに} 高志^{たかし}だった。

訪れる困難を乗り越えてまた一つ、成長するナギ。

彼女のひと夏の恋を。

1・日常

「^{なぎなた}凧刀の藤宮と呼ばれたアンタも、丸くなったものねえ」

なによ、文句あるの。

「うるさい、このロリ」

今日の前に居るのは、身長149?のロリ少女。

「あはっ、ナギは背も高いし美人だし、おまけに大人っぽい顔貧乳だけど」低身長で童顔の私の友達は、「貧乳だけど」の部分をやけに強調しながら皮肉っぽく笑った。

人が気にしてる所を……！

「うるさいっ！」

気にしている所を責められたら誰だって怒るでしょ。

ていうか、「なんで低身長でロリの癖に胸だけはでかいのよ」

目の前にいる私の友達、^{えんとつまき}遠藤真希は低身長でロリ。そうきたら次は貧乳！……のはずなのに、何故か胸が私よりも大きい。

「そんなの知らないよ。好きでなったわけじゃないし」それはそう
だ。

ところで、と真希は話を180度変える。

「今日、高志君は？」

高志とは、私の彼氏だ。

「今日は放課後に待ち合わせだよ」

高志は大学生で、一年間の付き合い。

「へえ、今日もラブラブだねえ」

にやにやしながら真希は続ける。

「エッチはもう、したよね？」

その言葉を聞いた瞬間に、私の顔が耳まで赤くなるのがわかった。

真希はいつも突然そっちに話を持っていく。

私は、そういう話に関してはいつまでも慣れないままだった。

「そういう事いきなり聞かないでよ！」

私は、赤く染まった顔を机に伏せながら言った。

ちなみに、高志とはまだエッチなんてしたことはない。

「一年も付き合ってるのに……？」

真希は新種の化石を発見した考古学者のような顔をして驚いた。
なによ、文句あんの。

「いいでしょ、別に」

他人の恋愛に首を突っ込まなくてもいいのに。悪趣味な奴だ。

「いやいや、普通一年間も付き合ってたらやってるって。高志君も
甲斐性が無いねえ。それに、ナギも。セックスは結婚してからって
頭沸いてるんじゃないの？」

呆れた様に口にする真希。

それ言い過ぎだと思っけど……。

「ほっとけ！」

私は強めの口調で言葉を投げた。

くそ、こついう話題では真希には勝てない。

「……はあ。あの凧刀の藤宮がこんなにも乙女になってるなんて……」

…」

真希は嘆息しながら頭を抱える

乙女ならまあ、それはそれでうれしいけど。

「てか、凧刀の藤宮って誰がつけたのよ。ださすぎ」

勝手にそんなださださなニックネームで呼ばれても。って感じだし。

「え、私」

勝手にださださなニックネームをつけた奴は目の前に居た。

今まで全然気づかなかったよ。なんで真希がつけてるんだ。

「ていうか、なんで薙刀なの？」

「薙刀の『薙ぎ』と、ナギの『凧』を掛けたら面白いかと思ってあと、名字が藤宮じゃん？ だから凧刀の藤宮。誰かに話したらその子がはまっちゃって。いつの間にかみんな使ってた」

呆気なく、何の悪気もなくニックネームの由来を説明する真希。

薙刀なんて物騒な物と掛けられた方はいい迷惑だ。

「そんな名前の由来の説明とかじゃなくて、なんで私に二つ名みたいのがついてるのかを聞いているの！」

いつも乙女な私なのに。

「いや、何回も不良をボコボコ倒してたでしょ。私乙女なの。なんて思ってるんじゃないよね？」

……正にその通りだった。

それよりも、真希の、恐らく私の物真似であろう「私乙女なの」には面を食らってしまった。

たぶん、ロリコンの人がこれを聞いてればお持ち帰りしたくなるんじゃないだろうか。

私は吐き気がしたけど。

「ボコボコになんてしてません」

なんたって私は乙女だから。

「嘔吐け」

……ごめんなさい。

「仕方ないじゃない。放っておけないし、見てたらムカつくんだし」
いじめられている子を放っておけないし、複数で一人をいじめる
奴は見てるだけでイライラするから。

真希は嘆息し、まあ。と続ける。

「それがナギのいい所なんだろうけど」

うん、よくわかってる。真希は。

「えへへ」

褒められると照れてしまう。

褒められたのかどうかはわからないけど。

「でもま、あんまり他人の事ばかり考えてたら疲れちゃうから、
たまには自分勝手にならなきゃ駄目だよ？」

やっぱり、真希はよくわかってきている。

「わかってるよ」

真希は小学校からの友達で、ずっと一緒。困った時も助けてくれたりする。

憎まれ口とかも叩いたりするけど、全然気にしない。私も、真希も。

私と真希は親友、なんだ。

私、藤宮^{ふじみやなぎ}凧が何故凧刀の藤宮と呼ばれていたかは大体わかんと思うけど、勘違いされたくないから一応ここで説明しよう。

昔々、ある乙女な、武術を習っていた女の子が居ました。その女の子は曲がった事が嫌いで、人がいじめられている所を見かけると放っておくことはできませんでした。そして、一人を寄って集って殴ったりする、俗に不良と呼ばれる人達の事がなによりも嫌いでした。

一方的な喧嘩を見かける度に、その間に割って入っては不良達を打ちのめしました。

……それを繰り返す度、いつしか彼女は『凧刀の藤宮』と呼ばれる事となりました。

以上、回想終了。

その瞬間に、授業開始のチャイムが教室内に鳴り響いた。

チャイムを聞いて、席に戻る真希が一言。

「あ、それと。乙女とか、口に出さない方がいいよ。似合わないから」突き放すように言葉を放つ真希。

……涙が零れそうだよ。

午後の授業は、眠たかった。

睡眠欲求を我慢できない私は、いや、私が悪いんじゃないで体が悪いんだ。とにかく、本能の赴くままに、眠った。

まるでタイムスリップしたような感覚だ。

いつの間にか授業も終わり、放課後となっていた。

「……………ねむ……………」

あくびを噛み殺して周りを見渡すと、視界の横から真希が入ってきた。

「ご飯食べたなら眠くなって寝るなんて、まるで子供だね。ナギは」

真希だけには言われたくないセリフだった。

そんなことよりも！ デートだデート！

健全なお付き合い。うん、乙女だ。

まだ半開きの目で真希を睨み付け、私は立ち上がった。

カバンを持って立ち去ろうとすると、真希がニコニコした顔をしながら私の腕を掴んだ。

「掃除」

よし、逃げろ！

なんてことを、乙女はしない。乙女な私はサボることなく掃除をきちんとこなす。

早く高志に会いたい。そんな気持ちに急かされて、私は箒を持つ手に力を入れる。

十分後、見事に掃除は終わった。

うん。私、乙女。

「あのね、事ある事に乙女乙女って言わないでくれる？ 乙女になりたいのは十分わかったからさ」真希の、手厳しい一言だった。

というか、口に出てたのかな……？

それとも真希ってエスパーだったり……

「……検討します」

真希の言葉を適当に流し、教室を出た途端、まるで私を待ち構えていたかのように、今度はクラスの子が私の腕を掴む。

「ナギちゃん！」

ぐ、捕まってしまった。早く高志の所に行きたいのに。

「何？」

急かす気持ちを落ち着かせながら、その子の方へと体を向ける。

「また相談、していい？」

本日五件目の相談事だった。

少しは私の事も考えてほしい。信頼されてるのは嬉しいけど、些細な事ですらも、自分で何も考えず私に相談してくる子達にはウン

ザリしていた。

正直、突き放してやりたい。でも、放っておけない。

損な性格してるかも。私。

気になる人とか、知らないよ！ もう！

早く高志に会いたくて少しだけ適当な答え方になったかもしれないけど、たまにはそれくらい、いいよね。

私は学校を出て、待ち合わせ場所に向かった。待ち合わせ場所と言っても、学校の近くの喫茶店だ。

たぶん高志は既に待ち合わせ場所に着いてる。駆け足で喫茶店に向かう事にした。

走ると喫茶店は更に近かった。当たり前だけど。

店の中を覗いてもまだ高志は居ない。

待たせる事はなくてよかった。

「ふう、よかった」

「何が良かったんだ？」

安堵の声を漏らした途端、後ろから突然声が聞こえ、びくつく肩に手を乗せられた。

明るいい口調で、親しげな物言い。間違いない。高志だ。

私が高志の声を聞き間違えるはずがない。首を横に向けると、そこには人懐っこい笑顔で、私の彼氏、高志が居た。

「びつくりさせないでよ」

高志と会っただけで自然と笑みが零れる。

「あはは、ごめんごめん。とりあえず、中に入ろうか」

高志は屈託のない笑顔で私の隣に並び、手を繋いできた。

幸せだ。

中に入り、テーブル席に向かい合って座る。

しばらくすると店員さんが注文を取りに来た。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

営業スマイルと、作られた綺麗な声。

でも、綺麗な女の人だ。

……胸も大きい。

「えっと、コーヒーと……ナギは何頼む？」

いつも通りに高志はコーヒーだ。

苦いのによく飲むなあ、と思う。

「私はジュース。甘いのがいいな」

苦いものは苦手というか、嫌いだから。

「なんだよ、なんか選べよ」

そう言っ て高志は私の方にメニューを向ける。

「んー……じゃあメロンソーダで」

「かしこまりました」

そう言っ て、店員さんは奥の方へ戻っ ていった。

「やっぱナギは子供だな」

もう、いつもいつもそればかり。自分は童顔のくせに！

「うるさい。高志は童顔で考え方も子供っぽいじゃん！」

子供と言われるのが悔しくてついついムキになってしまう。

「童顔は関係ないだろ、童顔は。今時コーヒーとか苦いものも全く飲めない高校生なんか居ないぞ。ナギの方が子供だ」

苦いものが飲めないからって、子供って言わないでほしい。

「この前まで世界征服がどうか言ってたくせに！」

そっちの方が子供だよ。

「ばっ、やめろ！ 恥ずかしい」

周りの人の視線を受け、高志は慌てて私の口を塞ごうとする。

「ふふーん。今でもカードゲームとかやってるし」

高志の家に行くといつも自慢気にカードを見せられる。

私はこれっぽっちも興味ないのに。

「カードゲームは男のロマンなんだよ！」

「あはは、何それ」

高志の熱弁に思わず笑ってしまう。

「とにかく、ロマンなんだよ！」

高志が熱く語りそうになっている所に店員さんが来て、コーヒーとメロンソーダを置いて行った。

「こゆつくり」

ずずず、とコーヒーをすすりながら高志は「あ」と言った。

「何？」

私はコップにストローをさしながら答えた。

「来週の花火大会さ、一緒に行こう」

デートのお誘い。

夏休みは補習があつて会う時間がちょっと少なかったけど、来週

なら丁度補習も終わっている。

高志といっぱい遊べる！

「行く！」

私は何も考えずに即答した。

「よし、なんだか今から楽しみだなあ」

高志は小さくガッツポーズを作り、頬杖をつきながら遠くを見つめた。

遠くを見つめるその顔はなんだかとても哀しくて、何かを抱えているような、そんな顔だった。

そんな顔を見せられて少し不安になりそうだったけど、次の瞬間にはニコニコした高志の顔が私の目に映った。

うん、ただの勘違いに決まってる。高志はいつも笑ってるもん。

「浴衣、着て来いよ」

唐突に高志は言った。

浴衣なんて女の子らしいものあったかなあ……

服装なんていつもＴシャツにジーンズだし。

……だから風刀なんて呼ばれるのかなあ……

「あるかわからないよ」

そう言つと、高志はテーブルから身を乗り出した。

「浴衣って普通持つてるもんじゃないのか！？　というか、夏と言えバ浴衣だろ。ナギ絶対似合つて！」

……似合つなんて、恥ずかしい。

「わかった。じゃあなかったら買いに行くよ」

今度真希にでもついてきてもらつて買いに行こつ。

「うん、そうしてくれ。そして俺を萌えさせてくれ」

真顔で頷きながら言つ高志。

なんか、キャラが違う。

「やっぱ買わない」

高志のオタク的な発言を聞き、私はぷいっとそっぽを向く。

「嘘、ごめん！ 頼むから！」

私の態度に高志は必死に懇願する。

仕方ない。高志の頼みだ。

「仕方ないなあ」

表面だけ、しぶしぶ高志の願いを了承した。

本当はお願いされるとすごく嬉しいんだけど。

喫茶店を出て、二人で辺りを歩く。

ただ話をして、歩いているだけでもとっても幸せな気分になれる。

しばらく歩くと、たまたま通りかかった駄菓子屋の前で子どもたち三人がカードを広げて遊んでいた。

「俺の方がつよって！」

「さっきは僕が勝ったじゃんかー！」

「ちょっと……二人ともお……」

見た所、二人が喧嘩をしているようだ。

残った一人が二人の顔を交互に見ながらあたふたしている。

そんな子どもたちを見た途端、私の横から高志は消えていた。

「お前ら何喧嘩してんだ。仲良くしなきゃいけないだろー？」

優しく諭すように子どもに語りかける高志。

放っておいてもいいのにも関わらずにそれを無視できない性格。

そういう所も私は好きなんだ。

後ろからボーっと眺めていると、喧嘩をしていた子ども二人がばつの悪そうな顔をしながら仲直りしていた。

うん、一件落着。

これでデートを再開 「おおおお！」

……しよつと思つた所、いきなり高志の叫び声が聞こえてきた。

……また始まったよ……もう。

うすうす予感はしていたけれど、やっぱりこうなっちゃうのかあ。

「このカード俺持っていないんだけど！」

何のカードかはよくわからないけれど、高志は子どもたちと同じ目線まで腰を落として何やら熱弁している。

たぶん、そのカードがどんなカードかを理解していない子どもたちに使い方とかを説明してるんだろうと思う。

「はあ……」

深く溜息をつく私。

こうなったら高志は終わるまで止まらない。

「どうだ、わかったかお前ら」

「うーん。わかんない！」

子どもたち全員が声を揃えた。

どうやら高志の熱弁は無駄になったようだ。

「まあ仕方ないか！ お前そのカード大切にしろよ」

それでも高志はめげずに子どもたちに笑顔を向ける。

「あれ？ お兄ちゃん、あの人。もしかして彼女？」

後ろで突っ立っていた私に気付いた子どもは高志をからかうように私を指差した。

「ナギいるの忘れてた……」

ボソツと高志が呟いたのを私は見逃さない。

「……誰を忘れてたって？」

気付くと私は高志の胸倉を掴んでいた。

「……すいませんナギさん……」

その言葉を聞いた途端、私はハッと我に帰る。

……私今、すごく怖い顔してるかも……

やっちゃった……！

私の姿を見た子どもたちは鬼を見たかのように恐怖で顔を歪め、後ずさりする。

「なんちゃって。冗談！ テヘッ」

私は瞬時に最高の笑顔を作って子どもたちに微笑んだ。

「……」

「……」

場の空気が凍りつく。

何も間違っていなかったはずなのに！

「……ははは……」

そんな空気の中で高志は苦笑いをし、続ける。

「このお姉ちゃん怒らせたら怖いからそろそろ行くな」

恐怖におののく子どもたちは、高志の言葉を聞いて震えを止める。

すごいなあ、高志。

「こういつのって才能なのかな？」

「じゃあな」

「うん！」

「行くぞ、ナギ」

ボーっとしていた私の腕を引くたくましい高志の腕。

歩みを進めて高志の横へ並んだ時、子どもたちが私たちを呼び止めた。

「お兄ちゃん！」

「ん？」

高志が振り向くと、子どもの一人がさっきのカードを手にとって高志に差し出している。

「これ、あげる」

「は？　なんで？」

訳もわからないと言った様子で、高志は首を傾げる。

子どもたちの感謝の気持ちってことかな？

気付いてあげなよ、高志。

私は肘で高志の横腹をつつく。

私の顔を見た高志をキツと睨むと、高志はようやく子どもの小さな手からカードを受け取った。

「ありがとな。大事に使わせてもらっわ」

「うん！　じゃあ、バイバイ」

子どもは満足そうな顔をして、笑う。

再び歩こうとする私たちに、また子どもの声が聞こえてくる。

「お兄ちゃんの彼女ちよつと怖いけど綺麗だよ！　お兄ちゃんもかっこいい！」

予想だになかったその言葉に私は思わず顔を赤くする。

子どもに言われるとなんだか照れるな。

「ははっ。当たり前だろ！ ナギは俺の嫁なんだからな！」

ぎゅっと私の肩を抱き寄せて子どもたちに手を振る高志。

反則だよお……

これだから高志のこと

大好きなんだ。

私達はその後も楽しく雑談した。

高志との時間は他のどんな時間よりも楽しい。高志と居るだけで、私の毎日はいつも楽しくなる。

でも、高志が時折見せる哀しげな顔が頭から離れない。

何か、あるのかも。

気がつけば、私はその事ばかりを考えていた。

2・募る不安

家に一人で居る時、考える事はやっぱり高志の哀しげな顔の事のことだった。

どうしても忘れられない。

思い返してみれば、数ヶ月前から高志は時折そんな顔をしていたようにも思う。

何かあるのかな。

考えても考えても、答えなんて出るはずが無かった。

気付けば時計は夜の十二時を指していた。明日も学校があるし、早く寝よう。

……夜更かしはお肌の天敵、らしいしね。

翌日、快晴の空の日差しに包まれながら、私は目が覚めた。

「あつっ……」

夏休みももう中盤だ。毎年毎年日本の夏は暑過ぎる。

なんて、そんなことを言っても意味はないけど。

夏休みですらも学校があるなんておかしい。暑すぎるし。

これはいじめだ。きっと私の学校は私達生徒を日光で焼いて食べたいんだ。

私は寝起きの頭で訳のわからない事を考えていた。暑さで頭がやられてるんだ、きっと。

今の時間は八時。

学校はお昼からだから、たっぷり余裕がある。

とりあえず、身支度を済ませよう。

……一時間程の時間を要して、私は大体の身支度を終えた。

朝ごはんだ。朝ごはん。

「今日はなんだろうなあ」

自室のベッドから腰を上げ、リビングへと向かう。

階段を降り、ドアを開ける。

テーブルの上には目玉焼き、ハムエッグ、味噌汁、ご飯が並べられていた。

うん、いつも通り。何が出るかなんてわかりきっていたのに、少しでも期待した私が馬鹿だったよ。

「おはようナギ」

新聞を広げながら、お父さん。

「おはよう、お父さん」

そう言いながら私は椅子に座る。

お母さんが居たなら毎朝の朝食メニューについて文句でもつけてやろうと思ったけど、どうやら今は居ないみたいだ。

まあ、文句言うならあんたが作れて言われて終わりだろうけど。

「私も料理ができれば朝ごはん作るんだけどなあ」

過去に何回か料理をしようとした事があったけど、ことごとく失敗し、更には台所が戦場となった。

「はははっ、ナギの料理は破壊的だもんなあ！」

軽快にドアを開けながら哄笑するのは私のお兄ちゃん。

「うるさい。馬鹿兄」

私は目玉焼きを箸に取りながらお兄ちゃんを睥睨する。

「おーおー。こえー」

棒読みだ。恐いという感情なんて全く見えない。

私はご飯を味噌汁で流し込んだ。

「いい食べっぷり！ 男らしいねえ！」

いちいち突っかかってくるな！

「ごちそうさま！」

私は味噌汁のお椀をテーブルに叩きつけ、お兄ちゃんの言葉を無視して立ち上がる。

「おい、あんま怒るなって。謝るからさ、な？」

お兄ちゃんは道を塞ぐように私の前に立った。

「別にいいよ、怒ってないし」

早く部屋に戻らせて。馬鹿兄。

「そっかそっか。ありがとな、ナギ」

ここまでなら良かったのに、この馬鹿兄は最後に余計な一言を付け加えた。

「それにしても、ぺったんこだな」

「……っ！」

もう我慢できない！

馬鹿兄のお腹に目掛けて私は腕を真っ直ぐに振りぬいた。

「ぐおおお……」

耐え切れずにうずくまる馬鹿兄。ざまあみろ。

馬鹿兄の屍を乗り越えて私はドアを開けようとする。

最後に聞こえたのは、「それでこそ俺の妹だ……いいパンチだった……」

と言いながら眠るDMのお兄ちゃんの声と、「何回見ても飽きないよ、お前達は」というお父さんの一言だった。

部屋に戻ってからはベッドに寝転んで本を読んだ。

友達が面白いつて言うから借りてみたけど、そこまで面白くは無かった。主人公が死ぬのは嫌だ。なんだか悲しませようとしている感じがして好きになれなかった。

まあ、暇つぶしにはなったかな。

「よし、行くか」

私はカバンを持って部屋を出る。

私が小説を読んでいる間にお兄ちゃんとお父さんは既に外に出て行ったようで、家の中には誰も居なかった。

お母さんは知らない。

台所にあったパンを食べ、靴を履いて玄関を出る。鍵もちゃんと閉めた。

「暑い……」

耐えられない程の熱気が私の体に押し寄せる。

クーラーの効いた部屋に長時間居たのと、外の気温が異常な程高いのが相まって、風呂の中のように感じた。

早く学校に行こう。

クーラーの効いている教室を目指して私は歩みを強めた。

私の学校は、そこまで頭の良い学校では無く、そこそこの、標準レベルの学校だ。

にも関わらずに夏休みにまで補習があるのは、私が特別進学コースとやらに入ってしまったから。

将来の為を思っと思いつてみたけど、毎年夏になると後悔する。

たっぷり遊べるはずの夏休みが半分になるからだ。

そんな、地獄のような補習も来週にはついに終わりを迎える。

名残惜しいなんてこれっぽっちも思っていない。

むしろせいせいする。

早く終わって残りの夏休みを遊びつくしたい。

私の家から学校までは十分。

たったの十分歩いただけでも汗がだらだらと肌にこびりつく。

校門をくぐり、早足で教室へと向かう。

ガラガラと教室のドアを引いた瞬間、冷たい冷気が私の体を冷や
す。

「……幸せ」

しばらくの間、こんな文明を作り上げてくれた先人達に随喜して
いると、クラスの人たちからのおはようコールが飛び交う。

「みんなおはよー」

そう言って私も席に座る。

汗はすぐに引いた。やはり、クーラーは素晴らしい。

ひんやりと気持ちの良い部屋を大いに満喫していると、早速相談
事が飛び込んできた。

私は相談事務所か何かと勘違いされているんだろうか。

「あのね、ナギ」

深刻そうに声をかけてきたのは昨日の女の子、真里菜まりなだった。

今度はなんだろう。

「んー？」

座ったままで頼杖をつきながら真里菜の方へと顔を向ける。

「実はね、バイトをしようと思ってるんだけど……」

なんじゃそりゃ。

わざわざ私に相談する必要ないでしょ。やりたいならやればいいのに。

「やりたいならやれば？」

投げやりにそう言うと、真里菜は、でも……と返答する。

「何？」

俯き加減の真里菜の顔を覗き込むと、真里菜は困った顔で言う。

「この学校バイト禁止でしょ？ だから悩んでて……」

なんだ、そんな事か。

「そんなの大丈夫だって！ どうせ見つからないし、見つかったって平気だよ」

バイトする理由はたぶん、服が欲しい。とかだ。

そんなに何着も服が欲しい意味がわからない。

「え？ そうなの？」

私は適当に言ったんだけど、私が言うと言説力があるのか、それを聞いた彼女の顔が綻んだ。

「うん、そうだよ」

これで一件落着だ！

「よし、なら私バイトする！ ありがと、ナギ！」

そう意気込んで真里菜はまた席へと戻っていった。

「……ふう」

一息つくのと、次は真希がやってきた。

「登校早々……人気者だね、ナギは」

嫌な気はしないけど、好きで人気者になったわけではない。

「もうこれは諦めるしかないよ……」

私は嘆息する。

「はは、乙女は大変だあ！」

なんか馬鹿にされてるような……

もういいや、寝よう。

「おやすみ……」

そう言いながら私は両腕を枕に、伏せるようにして目をつぶる。

私の眠りを阻害するように、チャイムの音が頭の中に響き渡る。

「タイミング悪いね、ナギ」

小さくほくそ笑む真希の顔が少し憎たらしかった。

「ほーい座れー」

私の都合なんてお構いなしに、先生は教室にずかずかと入り込む。

退屈な授業が、始まった。

ノートと筆箱を出し、それからはずっと窓の方をぼーっと眺めていた。

先生の言葉なんて当然耳に入るはずもなく、右から左へと突き抜けていく。

やっぱり考える事は、高志の事だ。

何があるんだろう。

何を隠しているんだろう。

何かある。

絶対ある。

時間が進むにつれて、私の中の不安は黒く渦巻いてどんどん大きくなっていく。

高志が私に隠し事なんて……

「ギ！ ナギ！」

気がつくともチャイムが鳴り終わっていて、私の肩を揺する真希が隣に居た。

「……あ、おはよう」

なんで、おはようなんだ。私。

「おはようじゃないよ。何かあったの？ 浮かない顔してたけど」
流石付き合いの長い真希。

でも、真希には心配させたくない。

「いや、ただぼーっとしてただけだよ」

ナギを心配させないように、できるだけ明るく振舞った。

「ならいいんだけど……」

真希は少し怪訝そうな顔をして、付け加える。

「何かあったらすぐ私に言うんだよ？」

「うん、わかった」

真希は、優しかった。

その日の授業はあっという間に終わった。

……高志の事。

もし、今朝読んだ本みたいに高志に、「俺の余命はあと三カ月なんだ」なんて言われたらどうしよう……

あんな本読むんじゃないかった。

何をしても不安は拭えない。

それどころか、ますます大きくなっていくばかりだ。

今まではこんなことがなかったのに。

浮気だったらどうしよう。

……いや、高志が浮気なんてするわけない。

どれだけ自問自答しても、納得の行くような答えは出なかった。

出るはずが、無かった。

その日は友達の誘いを断って真っ直ぐに家に帰った。

「ただいま」

靴を揃えて脱ぐと、リビングからお母さんが顔を出した。

「おかえり。どうしたのよ、そんな暗い顔して」

そんなにわかるぐらいに暗い顔してたんだ……私。

「いや、なんでもないよ。暑くてテンション下がっただけだから」

帰り道は暑さはさほど感じなかった。

多分、ずっと考え事をしてたから。

「そう。なにかあったら言いなさいよ？」

お母さんはいつも私の事を心配してくれている。

私の周りはいいい人ばかりで幸せなんだ。

素直にそう思う。

「ありがと、お母さん」

そう言い、私は部屋に飛び込んだ。

部屋で特にすることは無い。

食欲もあんまり無かったし、夜ご飯は少ししか食べることができなかった。

お兄ちゃんも私の様子を察したのか、いつもみたいな絡みはしてこなくて、なんだか少し寂しい気分だ。

いつもより早い時間だけど、私は寝る事にした。寝れば、何も考えなくていい。

「おやすみ……」

誰に言つでもなく、ただただ一人、寂しく呟いた。

3・最後の花火大会

一週間は本当にあつという間に過ぎ去って言った。

私はできるだけ明るく接するようにして、できるだけ誰にも心配を掛けさせないようにした。

……もう心配されてるかもしれないけど。

高志とは一週間の間、会っていない。

その分楽しみという気持ちもあるし、やっぱり不安もある。何かあるんじゃないかと。

勿論、メールはたくさんした。電話も、短い時間だけど毎日した。いつもと変わらない高志だった。

でも、文面だけで人の気持ちなんて読み取れる訳がない。声ならまだしも。

でも声を聞く限りいつもの高志だったから、少しだけ安心した。

何もない。そうだ、何もないんだ。

高志が私に隠し事なんてするはずがない。

ネガティブな私、バイバイ！

こんにちは、ポジティブな私！

「今日は思いっきり楽しもうっと！ 今年初の花火大会だ！」

うんと背伸びし、私は窓を開けた。

お日様の光が心地良く私を包んでくれた。

「おはよう」

陽気に、一人空に向かって微笑んだ。

おはようと言っても、実はもう昼過ぎなんだけどね。

お昼ご飯を食べた後、適当にごろごろして、夕方に高志が家まで迎えに来てくれる予定だ。

一週間ぶりに気持ちのいい朝が（いや、昼だけど）やってきたので気分はすこぶる良かった。

一週間も何悩んでたんだ。馬鹿みたい、私。

時間が解決してくれる事もあるとはこういう事か。と、一人うんうんと頷く。

ベッドの前で腕を組んで突っ立っているとお腹がぐうと音を立てる。

「…………お腹減った」

ここ一週間、悩んで悩んであまり食欲がなかったので当然と言えば当然だ。

リビングに降りてテーブルまで歩くと、ご飯がラップで包まれ、「チンして食べてね」というお母さんの書置きがあった。

靴も私のしかないし、家族はみんな出払ったようだった。

「みんな早いなあ」

そう思ってふと時計を見ると、時計は午後二時を指していた。

「…………はは。こんな時間だったんだ」

結構寝てたのか、私は。

思わず苦笑い。

チンしたご飯をゆっくりと食べていると、時間は三時だった。

「ご飯食べるの遅いな、私」

誰も突っ込んでくれないので、自分で自分を突っ込む。

……するともつと虚しくなった。

食器を適当に洗い、部屋に戻ってみたけど、

「暇だ……」

することが何も無い。

「んー……」

何か忘れてたような……

「なんだったかなあ」

えっと……

「あ！」

そうだ、浴衣を忘れてたんだ！

「高志の喜ぶ顔見たかったんだけどなあ……」

お母さんも居ないし……

私一人ではどうしようもなかった。

「あーもう最悪！」

ベッドにうなだれていると、まるで見計らったかのように「ただいま」とお母さんが帰ってきた。

急げ！ 急げ！ 浴衣だ浴衣！

「お母さああん！」

ドンドンと音を立てながら急いで階段を駆け下りて行く。

玄関に到着した私にお母さんは一言。

「ほら、浴衣」

お母さんは私の事を見透かしていたようだった。

まるでエスパーだ。

「わあ！　なんで？　なんで？」

興奮する私に母は冷静に言った。

「あんた、去年も同じことしてたじゃない。だから買ってきてあげたのよ」

そういえば、そうだった。

去年、高志が私の浴衣姿を見なくて悔しがってたのを思い出した。

「さっさと着付けするよ、ナギ」

時計を見ると高志の来る時間が刻一刻と迫っていた。

お母さんが買ってきたのは、黒を基調にした、少し大人っぽい浴衣だった。

「よいしょつと」

手際の良いお母さんの着付け。

あつという間に私の浴衣姿の出来上がり。

「髪はくくらくなくていいの？」

お母さんは私の姿をまじまじと見ながら言った。

「え？　なんで？　別にくくらくなくてもいいじゃん」

だって面倒だし。

「男は女のうなじが好きなの」

なんで女のお母さんがそんなことわかるのよ。

「いいよ、別に」

私が言つと、お母さんは溜息をつきながら、「女らしくないねえ、ナギは。誰に似たんだろっ」

多分、間違いなくお母さんに似ていると思う。

「お母さんだよ、きっと」

その言葉にお母さんにはにっこりと微笑んで「そうかもね」と言った。

持ち物の準備をしていると、家のベルが鳴り、高志が来た。

急いで階段を下りる。

玄関の扉を開けると、黒いツンツン頭の高志が居た。いつもよりちょっとお洒落だ。

高志は私の事を見ると、呆然と立ち尽くした。

「まじで綺麗……」

高志の口から放たれたその言葉にかーっと体が熱くなる私。

「……ありがとう」

私は、高志から視線を逸らして呟くように言う。

「よし、じゃあ行こう」

私の手を取って高志は歩き出す。

それに引つ張られるようにして、私は歩いた。

「それじゃ、冴子さん。行つて来ます」

高志はお母さんに深々と頭を下げた。

「はいよ。ナギを頼んだよ、高志君」

任せてください！ と高志は意気込んで、玄関のドアを開ける。

「お母さん、行つて来ます」

下駄を履きながら、私は家の外に出た。

会場に行くに連れて、浴衣や着物を着た人が多くなっていく。

この町の花火大会だけど、規模は結構大きい。

流石にテレビ中継とかはされないけど。

花火の音は町中に聞こえるし、家からも見えるからわざわざ会場まで行く必要はない。

だけど、やっぱり夏休みの思い出を作るという意味もあるし、会場でしか味わえない雰囲気と言つものがある。

だから私は毎年花火大会に足を運んでいる。

それに、食べたい物もあるし！

「ねえ、高志」

私より背の高い高志を見上げる。

「ん？ どうした？」

顔をこちらに向けて高志は私に視線を送る。

「ベビーカーステラ、食べたいっ！」

私の大好物、ベビーカーステラ。これが地球上に存在していなかったら、私は夏祭りになんてわざわざ行かない。

それぐらいに大好きだ。

「ナギって、容姿とか雰囲気とか大人っぽいくせに好きなものとかちょっと子供っぽいよな」

予想はついてたけど、やっぱりそんなこと童顔の高志に言われたくない。

自分だけからかわれるのは嫌だから、私は繋いでる手を離して高志の前に立った。

「高志だって童顔で考えとか子供っぽいくせに、趣味とか好きな物は大人っぽいというか、親父くさいよ！」

そう言って、べーっと舌を出す。

「俺達、間逆だな！」

確かに、そうだ。

ハハハッと笑う高志に私もつられて笑う。

「あはは。本当だね」

笑い合って、歩幅を合わせて歩く私達の目の前にはいつの間にか、溢れた人達で賑わっていた。

「人、いっぱいだ」

私は景色いっぱいに広がる人と夜店を見ながら呟いた。

「でも、俺達の世界は、二人きりだ」

高志のちょっとしただけドラマチックな言葉に私は少し、ドキッとした。

でも、私はそんな様子を見せない様にツンとした態度で高志に言い放った。

「それ、恥ずかしくないの？」

素直じゃない。私。

「かつこよく決まったと思ったんだけどな……」

あからさまに落ち込んだ高志の顔は、なんだかかわいと思った。

これが高志の言う萌えとかいうやつなのかな。

いつまでも立ち直りそうにない高志を少し不憫に思い、私は高志にギリギリ聞こえないくらいの声で言葉を零した。

「……ちょっと、ドキッとしたけど」

私、かわいくないなあ。

「え？ 今なんて？」

私の言葉に、高志は呆然と立ち尽くす。

放っていつちやえ。

「二回も言わないよ。早く来ないと、置いてくよ？」

私が五歩くらい先に歩いた所で、ようやく高志は私を追いかける。

「待てよ」

そう言って、手を繋いでくれた。

私は、小さく笑う。

「何笑ってんだ？」

そんなの、決まってる。

高志と居るのが、楽しいからだ。

「んー？ 秘密」

恥ずかしくて、口に出せる訳ないよ。

「なんだよ、それ。恋人には秘密は無しだろ」

そんなこと、知らないもん。

「乙女は秘密のひとつやふたつくらいあったって良いの!」

そう言ってから私は、「……好き」

今度は誰にも聞こえないくらいの声。

お囃子の音や、周囲の人たちの声。色んな物が私の言葉を掻き消した。

自分にも届かないくらいに、それは小さな声だった。

「乙女、ねえ」

疑うようにじろじろと私の体を見る高志。

特に、胸を。

「相変わらず、胸小さいな」

人が気にしてる所を……！

「いいでしょ、別に！ 小さいのが嫌なら胸の大きい子の所へ行けばいいじゃん！」

冗談ぽく笑いながら、私は言葉を投げた。

高志は、他の子の所になんて行かない。そんな返答が欲しくて、わざとこんな言い方をした。

高志なら受け止めてくれるから。

「馬鹿。俺が他の奴の所なんか行くわけないだろ。それに、貧乳の方が俺は好きなんだ」

……嬉しかった。けど、約一年間付き合って何のカミングアウト？ 貧乳が好きな人が居るって都市伝説だと思ってたよ。

軽蔑の視線で高志を睨む。そして手も離す。

「わっ。わわ！ おいナギ！ そんなに引かなくてもいいだろ！ でも俺はそんなお前が好きなんだ！」

腕を広げ、動揺しながらも必死に弁解しようとする高志。

でもその言い方だとちょっと勘違いされるかもしれない。

引いてる私の事が好きなんて、なんだかちょっとマゾっぽいよね。

あれ、違うかな？

ま、いいや。

「あはは、冗談だよ」

放っておくと高志が薄く涙を浮かべてきたから、今度は私から手を繋ぐ。

「何、そのアメとムチ」

そう言いながら、高志は私の手を強めに握る。

私を放さないように。

なんて、ただの私の願望だけど。

「反則だ！ お前」

大袈裟にリアクションする高志。

いつも通りに、いや、いつも以上に笑いあう私達。

この前までの不安は一体なんだっただろう。そう思うくらいに
当たり前のようなひと時を私は過ごしていた。

私は、高志に感じていた不安なんてものは無かったかのように、
今を楽しんでいた。

会話をしながら二人で会場を歩いていると、間もなくして花火が
上がり始めた。

お腹の底に響くような轟音と、眩しいくらいに空に輝く大輪が私
の感覚の全てを奪った。

「……綺麗」

私は小さく呟く。

その声は、やはり轟音に掻き消されて高志には届かない。

私は、手を繋いでいる高志の横顔を盗み見る。

その横顔は、いつも見る高志の顔ではなかった。

花火の光に照らされて、なんだか凜とした、大人っぽい顔。

花火にも目も暮れず、高志を見つめる私。

視線に気付いた高志は、ふと私に視線を落とすと、ちゃんと聞こえるように。耳元で囁いた。

「好きだ。ナギ」

当たり前の事だと思っていたけど、言葉にすると不思議なもので、その魔法のような言葉は私の心を驚掴みにして離さなかった。

私も、言いたい。

素直になるんだ。

「……私も、好き」

普段は恥ずかしくてこんな事言えないのに。

なんだか今日は、最高に気分が良い。

言えない事も、すらすら言える。

だけど、幸せそうな顔をしている高志を見ると、意地悪をしたく

なった。

「……嘘だけど！」

……本当はそんな言葉の方が嘘なんだけど。

私、ひねくれてるのかな？

「はあ！？　嘘だろ！？」

愕然とした高志の顔を見て満足した私は、本当の事を高志の耳元で囁く。

「好きじゃなくて、大好き」

私は、高志の事が大好き。

一番、大好き。

愛してる。

「お前……それは反則だって」

安堵の混じった溜息をつくとき、高志は私の瞳を真っ直ぐに見つめた。

お互いに、見つめ合った。

私は高志の背中に腕を回す。

そして、目を閉じ、ゆっくりとお互いの顔を近づける。

高志と私の距離は、ゼロになった。

私の体は微熱を帯びていた。

私は、高志の声に、瞳に、その全部に恋をしたんだ。

とてつもなく、幸せで、このまま時間が止まってしまえばいいとさえも思った。

高志と、出会えてよかった。

繋がる事ができてよかった。

今この瞬間を高志と一緒に居る事が心の底から嬉しかった。

最後の花火が散る。

それと同時に夏が終わるんだと、少しだけ切なくなつた。

花火が終わっても夜店はまだやっていた。

これを逃すわけには行かない。

「高志、あれ！ ベビーカーステラ！ 早く！」

花火を見終わって、ベビーカーステラを見つけた私は、一目散に屋台へと駆ける。

「あんまり急ぐなよ」

笑いながら、走る私の後ろからゆつくりと歩く高志。

「……でかつ」

高志が私に追いつき、私の持っている袋を見て呆然とする。

「何円分のやつ？ それ」

「超特大。二千元」

私は即答した。

「……ははは」

高志は哑然としている。

「おいしいから！」

祭りに来たからにはベビーカーでしょ、特大の！

勿論、一人で食べる。

「それ一人で食べるのか！？」

高志は驚愕の表情を浮かべる。

「うん」

もぐもぐとベビーカーを頬張りながら首を縦に振る。

「一個だけ頂戴。口移しで」

変なこと言わなかったらあげたのに！

「ふんっ。あげない」

私はそっぽを向き、ベビーカーを口に入れながら、大勢の人が流れる方向へと歩く。

「待て、ナギ！」

間を持たず、高志は私の隣に来てまた手を繋ぎなおす。

仕方ないから、一つだけあげる。

「一個だけ。あーん」

ベビーカーを一つ手に取り、高志の口へと近づける。

「お、おう」

少しだけ焦りながらも大きく開けた高志の口に、ベビーカーを放り込んだ。

「うん、うまいな」

「でしょー！」

流れるままに歩いていると、今度は高志が奇声に似た声を上げながら、一目散に店へと走る。

「うおおお！ ウルトランのお面！ これいくらですか！？」

やっぱり、高志は子供だ。

嬉しそうに私の元へと戻ってきた高志は頭についさっき購入したお面を装備していた。

「やべえテンション上がったきた」

……呆れて何も言えない。

「……はあ」

「どうした？ ナギ」

私が大きく溜息をつくとき、高志は私の顔を覗き込みながら言った。

「いや、やっぱり高志は子供だな。って思ってた」

今時ウルトラマンって、どうなの。

「うるさい。コーヒーも飲めないお子ちゃまな口してるくせに」

冗談ばく笑って、高志は私の手を取った。

すると、高志はいきなり変態チックな発言をする。

「そつえばさ、ナギっていつもジーパンはいてるけど、綺麗な脚してるんだからスカートとかはいた方がいいよ」

スカート履かないと女らしくないって言いたいのか？

「恥ずかしいから嫌だ」

私は普段も制服のスカートを膝下辺りにしてるから、あんまり脚を露出することはない。

というか、脚を見せた覚えがない。

「勿体無いなあ」

残念そうに肩をすくめる高志。

高志が言うなら、今度はいってみてもいいかも。

そのうち、はーっ。

歩き続けると、少し疲れてきた。

「もうだめだあ」

ふらふらした足取りで人の波から離れ、道端に腰掛ける。

「大丈夫か？」

心配そうに高志は私の頭を撫でる。

「うん、ちょっと休憩したら大丈夫だよ」

涼しくて気持ちの良い風が、私の頬をくすぐる。

腰掛けたまま、お互いに無言で手を繋いでいる私達。

会話なんて無かったって、寂しくなんかない。

隣に、確かに高志がいるから。

そう思っていた時、突如高志が口を開く。

「あのさ、ナギ」

「ん？」

何も考えないで、お祭りの風景を見ながら私は答える。

「今日、誘ったの。言わなきゃいけない事があるからなんだ」

それを聞いた途端、胸がざわつく。

「どういうこと……？」

言葉が震える。

頭の中には押し殺したはずの不安が再び膨れ上がっていた。

「本当は、もっと早く言うべきだったんだろうけどさ」

高志は、この前までと同じ哀しげな顔を私に向けた。

嫌だ。嫌だ嫌だ。

聞きたく、無い……

「俺、留学する事になった。だから、もうナギとは会えない」

『もう会えない』

残酷な言葉が私の胸を深くえぐった。

「な……んで……」

唇が震えて上手く声が出せない。

認めたくない。そんな現実。

私は認めない。

「前から決まってた。留学は俺がずっとやりたかった事なんだ。親父もお母さんも、金の事なら心配するな。お前の好きなようにやれて。今まで厳しかった親父が快く送ってくれるんだ。だから……」

高志の言葉は私の耳には入ってこなかった。

聞きたくなかった。

ただ、目の前はぼんやりとした屋台の明かりで広がっていった。

「いつまで……?」

私は震える声で必死に搾り出した。

「三年」

高志は呆気なくそれを口にする。

三年。

ちっぽけなはずの『三』が、途方もなく大きくて、重く感じる。

「なんで……なんで………」

訳もわからず、頭の中がぐちゃぐちゃに掻き回されてる気分だ。

そして私はとうとう、抑えきれない感情をそのまま高志にぶつけてしまった。

「なんでもっと早く言ってくれなかったの！ いきなり過ぎるよ！」

高志は私の事を想って留学の事を伝える事ができなかったんだろ
う。

それなのに。

それなのに私は、わがままで、自分勝手に激昂して、高志に怒鳴りつける。

涙が溢れ出てくる。

目の前が見えなくなる。

私達が、見えなくなる。

「じめん……」

高志は涙を流しながらただ謝る。

高志は悪くないのに。

高志が離れる事を拒絶するわがままな私が一番悪いのに。

それでも私は怒りをそのままぶつける。

「なんで……なんで留学なんてするのよ……！　ずっと一緒に居たかったのに……！」

涙で顔がぐしゃぐしゃになる。

体が熱い……

「だから、別れよう。俺達」

瞬間、時間が止まったかのように感じた。

混乱する頭でもはつきりと理解できる。

高志には言われなくなかった言葉。

世界一、言われなくなかった言葉。

今高志は、私に別れを告げている。

目の前の視界がぐるぐる回る。景色がぐにゃりと曲がる。

「……やだ……！」

感情で動くなんて、本当に子供みたいだ。

「……………」

悲壮な表情で歪んでいる高志を置いて、私はその場から走り去った。

止まらない涙を必死で隠しながら、私は家に帰った。

下駄を乱暴に脱ぎ捨て、お母さんの言葉を無視して階段に駆け上る。

がしゃんと大きく音を立てながらドアを開け、その勢いのままベツドに飛び込んだ。

嗚咽を漏らし、枕を涙で濡らす。

お母さんに着付けしてもらった浴衣は、ひどく着崩れている。

私の心はスタボロになっていた。

「もうやだ……………」

なんでこんな事になったんだろう。

こんな現実が待ってるなら、高志を好きになるんじゃない。
出会うんじゃない。

なんで、私達は出会ってしまったんだろう。

4・さよなら

高志は来週に日本を発つらしい。

出発する日がメールで送られてきた。

高志はもう、別れたつもりでいるんだろうか。

「一週間か……」

私は一人、ベッドの上で腫れた目を押さえながら呟いた。

「どうすればいいんだろう……」

こんな事になるなら、本当に出会わなければよかった。

別れというものは突然だ。

突きつけられた現実には、私を容赦なく貫いた。

高志とは、ずっと一緒だと思っていたのに。

けど、それはもう叶わない。

別れよう。その言葉が、悲哀に満ちた高志の顔が。今でもはつきりと私の脳裏で鮮明に流れ出す。

もう、駄目だ。

あれだけ愛し合っていたのは、偽りの感情だったっていうの……？

なんで……

高志は私よりも留学を取るの……？

そんなのわかってる。

昔から留学したいって行ってたし、子どもの時からの夢って事も知ってる。

厳しいお父さんにもやっと認められて説得できたって。

知ってる。

私よりも大切なんだって。

知ってる。

「考えるの、やめよう」

言葉だけそうは言っても、頭の中を巡るのは高志の事だけだ。

忘れれるはずがない。

ずっと、一緒だったんだから。

今まではもつと好きになりたい。

そう思ってた。

だけど今は、嫌いになりたい。

そう、思っていた。

高志の事を嫌いになれば、もう傷つく必要はないし、こんな事も考えなくていい。

嫌いに。嫌いに。

そう思う度に脳裏に浮かぶのは高志との日々だった。

あんなに楽しかったのに。

自然と、涙が流れる。

泣き疲れて寝て。

起きて、泣いて。

泣いてばかりの私はやっぱり子どもなのかな……？

高志……

私の心は何度も何度も揺れていた。

高志をずっと好きで居たい気持ち。

高志を嫌いになって、忘れない気持ち。

好きでいたい。そう思う度に思い出す、別れよつの一言。

どうしても忘れられない。

高志を忘れようとしても、嫌いになろうと思ったとしても。

今まで過ごした高志がそれを邪魔する。

どうしようもないくらいに好きで、愛していた。

そんな高志を失う事が、こんなにもつらいことなんて。

今まで考えた事がなかった。

考える必要はないと思っていた。

それなのに、こんな現実って……

何回考えても、結局答えなんて出ない。

別れを告げられた今でも。

高志の事を、好きなのに変わりはないから。

でも、忘れない。忘れなくちゃいけない。

高志が目の前からいなくなってしまうから。

変わりようのない現実が、私の頭の中を何度も何度も、ぐるぐる

と回り続ける。

こんなことを考え続けると、吐き気がしてきた。

もう駄目だ。

私は高志なしでは生きる事ができないんだ……

そう、実感した。

高志のいない、私たちの世界で。

高志がいないのに、私たちだなんて。

私たちの世界はいつの間にか壊れてしまっていたんだ。

積み重ねてきた長い時間を、たった数分で。

ぐちゃぐちゃだ。

私は、ぐちゃぐちゃだ。

何がしたいのかも、何をすればいいのかも、わからない。

私の世界は、真っ暗に塗りつぶされたようだった。

一週間後、高志は居なくなる。

それなのに私は何もせずに、ただ人形のように毎日を過ごしていた。

陰鬱な雰囲気をもといながら。

家族のみんなの心配そうな顔も目に入らない程に、現実から目を背けて。

ただ、毎日を過ごしていた。

……人形のように。

最後の日はあっという間にやってきた。

時よ止まれと願おうとも、そんな願いが叶うはずはなくて。

その日はなぜか日が昇るのとほぼ同時に目が覚めた。

「……最後の別れがあんなのでいいのかな」

そう呟いて、思い出すのは夏祭り。

最後に高志に会った日。

「でも、会いたくない……」

頭が、会う事を拒否してるみたいだった。

動かそうとしても、重たい体。

どうせ何もしないし、寝よう……

そう思った時、突然チャイムが鳴った。

「誰……？」

普段はこんな朝っぱらからは人なんて来ないのに。

どたどたと一階から足音がする。

たぶん、お母さんだろう。

玄関が開く音がする。

一階から私の部屋へ音は届かない。

だから、朝一番の来訪客とお母さんが何を話しているかなんて私には聞こえないし、興味も沸かなかった。

だけど、すぐにどたばたと階段を駆け上る音がする。

そして、私の部屋の扉を勢いよく開ける。

「こらナギ！」

そこに立っていたのは幼馴染兼親友の真希だった。

なんで……？

「あんた高志君送りに行かないの！？」

なんで、その事を真希が知ってるんだろう。

真希の言葉に、夢うつつな私は現実に戻された。

今まで、ずっと逃げてたけど、今日……なんだ……

「私……」

でもやっぱり駄目だ。

体が動かない。

「まさか嫌いになりたいとか考えてるんじゃないでしょうね」

真希の言葉は、ズバリ的中していた。

「……えっと……」

完璧正解の真希の言葉に、口ごもる私。

まさか真希が高志の事を知っているとは思ってなかったし、その上私が思ってる事を当ててしまうなんて、完全に予想外だった。

「あんた馬鹿ね。こんなことぐらいで揺らいじゃうの?」

こんなことくらいって……!!

「こんなことくらいじゃない! 高志が居なくなっちゃうんだよ!」
「?」

目の前から高志が居なくなる事をこんなこと扱いされた私は、激昂してしまつ。

「所詮こんな事だよ。あんたの高志君への気持ちはその程度だったの？」

全く動じずに、真希は真つ直ぐに私を捉える。

「それは……」

また、高志が私の脳裏に浮かぶ。

「高志君の事が好きで好きでたまらなくて、高志君は幸せな毎日を作ってくれたんじゃないの？」

……その通りだ。

高志が居なかったら、今の私はここには居ないんだ。

「毎日幸せそうだったじゃない。そりゃ、高志君としばらく会えないんだから泣くのも当然だと思つし、落ち込むだらうけど」

真希は、続ける。

「たった三年間会えないだけで冷めるの？ ナギの気持ちは」

体が震える。

涙が溢れそうになる。

そうだ、三年なんだ。

たった、三年なんだ。

世界が明るくなったような気がした。

私の世界に、光が差し込んだ。

「そうだ……そうだよね……」

次の瞬間には私の頭の中でもう決心はついていた。

「私、馬鹿だった。うん、行く！ 今から行く！ 後頼んだ！」

そう言いながら、私はすぐに着替えを始める。

気がつくとい今は七時。

まだ間に合う！

「任せなさい。それでさっさと行って来い！」

真希は満面の笑みを私に向けて、背中を押す。

「うん。行ってくる」

私は走って階段を降りて、お母さんに「行ってきます」

とだけ伝えて玄関を飛び出た。

背中で、「行ってらっしゃい」と、優しい口調のお母さんの声を
受けながら。

私はとにかく走った。

呼吸の乱れも、体が軋むのも気にせずに、ただ、走り続けた。

駅に着き、はやる気持ちを落ち着かせ、切符を買う。

私を待っていたかのように、ホームに着いた途端に電車が滑り込んできた。

ラッキーガール、私！

「はあ……はあ……」

一旦落ち着くと、思い出したように疲れが私の体に降り注いだ。
た。

うまく呼吸ができくて、つらい。

でもこれくらいどうつてことはない。

何も伝えないまま高志と別れる方がずっとつらいに決まってる。

電車が止まり、何人もの人が降りていく。

高志は、この駅にいるはず……

降りる人たちに流されるように駅のホームに降り、改札まで歩く。
。

溢れる人の中で一人を探すなんて簡単な事ではないのに。

知らないうちに、私の瞳はしっかりと、真っ直ぐに高志を捉えていた。

涙が零れそうになる。

一週間ぶりなのに何ヶ月も会ってない気分だ。

でも、今日はもう泣かない。

少なくとも高志の前だけは。

視線が交わる。

交わらなければいいと思っていた視線が、こつも簡単に、忘れられないくらいに交差する。

「ナギ……」

高志の頬にうつすらと一筋の線が流れる。

他に誰も人は居なくて、私たち二人だけの世界。

それが、ここにはあった。

「来ちゃった」

高志の前に立つ。

反応も見ずに、私は高志の手を引く。

そしてそのまま高志が乗る電車のホームへと向かう。

「ナギ……俺……」

男が涙を零すなんて、かつこ悪い。

でも、そんな高志がたまらなくいとおしく思う。

「いいよ。大丈夫、謝らなくていいから」

もう、気にする事じゃない。

知らせるのが遅かったとか、そんなことどうでもいいんだ。

高志を迎える電車のホームで手を繋いだまま、電車が来るのを待つ。

「今日、で……最後、に……」

嗚咽を漏らし、涙を目いっぱい流しながら必死に言葉を紡ぐ高志。

今日で会うのは最後？

違うよ。

そうじゃない。

電車がやってくる。

高志を迎えるように扉が開く。

私たちを引き裂くように、扉が開く。

「三年だって、五年だって、十年だって待ってやる。だから、最後

じゃないよ。ちょっと会えないだけ」

これが、私の本心だ。

高志と別れるなんて事は有り得ない。

呆然とする高志。

その高志を無理やり立たせて、電車に目をやる。

「ほら、行つてきなよ」

私は高志の背中を押す。

「お、おいちょっと待てっ！」

お構いなしに、電車へと押し込む。

「ずるいぞっ！ お前！」

私を忘れられなくしてやる。

向こうに行っても、どんな美女に出会っても目移りなんてさせない。

ベルが鳴る。

もうすぐドアが閉まって電車が行ってしまふ。

最後に、私は高志にキスをした。

触れるだけの、子どものキス。

でも、距離はゼロだから。

どんなに離れてても、心はぴったりひつついてるから。

もう、気持ちは揺るがないよ、高志。

「えへへ、バイバイ」

うつすら目に溜まる涙を無理にこらえて笑顔を作る。

「好きだ！ ナギ！」

その言葉と共に、扉は閉まった。

「私も好きだー！」

きつと聞こえてない。

でも、聞こえてる。

走り去っていく電車を見送り、残った私は人込みの中、一人佇む。

「高志がこっちに帰ってくるまでに、もっと良い女にならなきゃ！」

拳を高く突き上げ、高志の事を思い浮かべる。

こうして、私の淡い恋模様の夏は終わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7369q/>

夜空に響く

2011年10月8日18時10分発行